



渡部 徳之さん(小丸)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：6月21日

それぞれの事情に合わせていくしかないと思う



浪江では会社に勤めながら田んぼや牛を育てていた渡部さん。

昨年6月に二本松市に家を構え、お母さんと暮らしています。近所に借りた畑で自家用の野菜を育てながら、これからについて模索中です。

◆震災から避難するまで
震災が起きて、牛がいるので避難せずに家にいました。近所も何軒かいたし、電気も通っていたのでそのまま生活してました。テレビで爆発を知りましたが実感がなく、請戸の近くまで町の様子を見に行く人がいなくなっていました。そのうち津島でもだんだん避難する人が出てきたので、母と軽トラックで犬と猫を連れて家を離れることにしました。避難当日は寒い中、車中泊。それから川俣、伊達、猪苗代と避難先を転々と誘われて二本松の仮設住宅で母と暮らすようになりました。

◆浪江での生活
震災の5年ほど前に父が亡くなり、父の仕事を引き継がないといけないという思いから田んぼや牛を育てることになりました。ほとんど経験がなかったため、近くの本家に相談しながら一からのスタートでした。朝、明るくなる前に牛の世話をしてから勤めに出る、帰ってきてからまた世話をするという生活で、母もまめに草刈りをしていました。

◆仮設暮らしから今に至るまで
旧平石小学校仮設で約4年間避難生活をしてきましたが、その間の2年ほどは班長として自治会の手伝いをしました。浪江では病気がらずの母でしたが、仮設に来て2年目から体調を崩し入院。本人は入院が必要ない様子で、なかなか受け入れられない様子でした。今は介護認定を受けて、週に1回ヘルパーさんに来てもらい、糖尿病に必要な食事管理をしてもらっています。

家を構えることになったきっかけは、知人の「帰還困難区域で帰れないけどこれからどうするの？」という問いかけでした。自分のところは除染や整備をしていないので、漠然とこちらで生活するしかない、復興住宅か借上げに住もうかと思っていました。家が、その問いかけから、じゃあ、やるか、と心を決めました。もちろん、どうやって建てたらいいかという不安はありました。でも、家ができて引っ越してから自信が積みまわりました。ちよつとずつ近場の人も馴染んできました。去年から畑を借りて、浪江ではやったことがなかった玉ねぎの収穫をしました。今は、キュウリ、ナス、

◆今、思うこと
こちらに家を構えたから周りの付き合いをしていくしかないと思っています。みんな事情はそれぞれだから、向こうで生活できる人はいいけど、うちはできないし。若い世代が戻る見込みがあればいいんだけど、向こうで生活するのは難しいんだらうな、多分。これから建設関係の資格を取って、それを活かせるような仕事探しをしていこうと思っています。



▲幸運を呼ぶふくろうグッズを集めています

浪江のころ通信

◆第63号◆

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信」第63号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218

再取材シリーズ 再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。3・11から5年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。





渡部 直美さん(酒田)

取材者：(特非)おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
(一社)いなかパイプ 佐々倉 取材日：7月25日

生きてることに感謝しながら、 夢に向かって歩いています



▲昭和レトロな店内。
こだわりのコーヒー
カップ。是非一度、
足を運んでみてくだ
さいね。

ダイニング雑貨カフェ 「はじめのいっぽ」

愛媛県伊予郡松前町鶴吉713-8
TEL 089 (900) 1143

気軽に飲み物だけでも来店しやすいようなカフェ、ふらつと立ち寄って楽しんでもらえるように可愛い手作り雑貨のお店、この組み合わせです。ここは私の夢を叶える場であると同時に、みんなの集まる場所にしたいと思っています。子育て中のママも高齢の方も、避難してきた人も地元

2011年10月の「こころ通信」では、「みかんで福島と愛媛をつなぎたい」と、熱い胸のうちを語ってくださった渡部さんご夫妻。その後、農業や養鶏を続けながら、夫の寛志さんはNPO法人を立ち上げ、被災地の復興・避難者の支え・防災の活動も展開中。今回は、ダイニング雑貨カフェ「はじめのいっぽ」をオープンされたばかりの直美さんにお話を伺いました。

◆「カフェをやるうと思われたきっかけは、何だったのですか？」
元々、お菓子作りが大好きだったんです。浪江に住んでいた頃、実家のある南相馬で託児所を開いていました。私はチャイルドマイスターという資格を持ち、子どもたちと接していたのですが、そのおやつに私がケーキを焼いていたんですよ。愛媛に避難してすぐは子育てと農業を一生懸命やりましたが、長男が産まれてからは、近所の食堂でパートを始めました。パートに始めて3年近くが経った時、週に一日だけオープンするケーキ屋さん「なみえスイーツ」を始めました。イベントにも出店して、ケーキのファンも増えて、楽しかったですね。でも楽しいのは楽しいんです

けど、まだ子どもが小さいこともあり、何かひとつに集中したいと思うようになりました。「自分で何かをやるなら好きなこと。」30歳を過ぎ、夢を早く叶えなくちゃいけないという焦りもありました。友達も「やるなら今だよ」と背中を押してくれ、たまたま良い物件が見つかったので、「よし、やろう!」と。
◆「お店の名前、素敵ですね。込められた想いを聞かせてください」
朝、ぼんやりしている時にパツと思いつかんなんです。「はじめのいっぽ。わ、いいな、これだ!」って思いました。開店は28年4月29日、4歳になる長男(寛助君)の誕生日にしました。ダイニングとしては、毎朝仕入れに行く新鮮な地元野菜を使ったランチ、食事をしなくても気軽に飲み物だけでも来店しやすいようなカフェ、ふらつと立ち寄って楽しんでもらえるように可愛い手作り雑貨のお店、この組み合わせです。ここは私の夢を叶える場であると同時に、みんなの集まる場所にしたいと思っています。子育て中のママも高齢の方も、避難してきた人も地元

の人も、対象は決めずに、本当に誰もが集まれる場所。お店が営業してない時には場所を貸し出して、いろんな体験会などに利用してもらえたら嬉しいです。婚活パーティーも面白いですよ。
◆「夢の一步を踏み出されたばかりですが、そのずっと先のことをお考えでしたら教えてください」
震災直後、子どもにはひもじい思いをさせました。それでも、生きてるって運がいい、生きてるだけでもすごいんだと感じています。あの日、避難するときに、飼っていた豚を野に放したんです。それが秋になって、見つけたと連絡が来たので、すぐに迎えに行つて今も一緒にいますよ。震災から5年が過ぎて、借家だけれど、家に帰るとホッとします。愛媛に愛着を持って暮らしています。テレビで福島の映像を見ると、今でも涙が出ますね。ここにも海はあるけれど、やっぱり福島の、波のある海が好き。福島の梨やりんごが美味しかったな。じゃ、福島に戻るのってどうと。移住も考えています。まずは、安心して暮らせるところで子どもたちを育てあげたいです。そして、子育てが落ち着いたら、世界中の国を巡りたいな。それまで、しっかりと働いてお金を貯めな



渡部 茂子さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：6月28日

浪江の皆さんとおしゃべりすることで、 元気をもらっています



▲「なみえ絆いわき会」の活動拠点「なみえ交流館」にて。いつも笑顔で活発に活動する渡部さん。

浪江町では印刷業を営んでいた渡部さんご一家。会津と愛知県豊橋での避難生活を経て、平成23年7月に福島県いわき市に移りました。

現在、茂子さんは市内の復興住宅でご主人・お義母さんとともに3人で暮らし、「なみえ絆いわき会」のメンバーとして、訪問ボランティアを続けています。

◆「訪問活動『なみえ絆』」
いわき市に避難した浪江の人たちが集まるうじゃないかというところで、平成24年2月に「なみえ絆いわき会(以下、「絆会」)が発足しました。市内には浪江町民が入居できる仮設住宅がなく、ほとんどの方が借上げに住んでいたため、町の情報も支援もなかなか届かなかったんです。それで男性の有志が会を立ち上げ、浪江の人に呼びかけて会員になっていただきました。「絆会」の活動の一環として、私を含め14人の女性がペアを組んで市内に住む浪江の方のお宅を毎月、訪問しています。名前は浪江のバスにちなんで「ぐるりんこ」。私は鈴木幸子さんとペアを組み、小名浜地区の50軒ほどを担当していますが、おしゃべりしているとなぜか時間が過ぎてしまうので、3日間くらいかけて回ります。「ぐるりんこ」を始めたら、の頃は、人と話をする気持ちになれないと言っていました。でも、やっぱりお顔を見て皆さんの話を傾けることが大事だよってメンバーと話し合いました。訪問を続けるうちに結果が出てきました。話をするうちに涙を流され、最後には笑顔になつてくれたり、「次はいつ来てくれるの?」と聞かれたりするところもあるし、なにより元気な方が増えました。私も、皆さんとおしゃべりすることが生きる張り合いになつていきます。

◆「思い出は誰にも奪えない」
浪江では、夫と息子が印刷業を営んでいました。原発事故のために印刷機はすべて使えなくなり、借金だけが残ってしまつて、家業は廃業せざるを得ないし、年金だけでは暮らしていけない。都民一千万人に対して私から二万人は虫けら扱いじゃないかと、悔しさで胸が苦しくなつたこともあり。でも、そういう気持ちには封印したんです。目をつぶると、震災前の浪江の懐かしい景色しか頭に浮かびません。ふるさとの思い出は誰にも奪うことができないってこ

とに気づいたら、怒るのがばかばかしくなつちやつたんです。自分の力でできるだけのことはしなくちゃと思って、賠償金を活用してローンを返済し、機械類は専門業者に頼んで処分するといったことを少しずつ進めています。1日1ミリずつ前に進んでいる感じがします。
◆「孫たちに伝えたい浪江の良さ」
気持ちを切り替えられたきっかけの一つは、外国の芸術家さんが東京で開催した写真展です。原発事故で無人になった町の記録を残すという趣旨の写真展で、2年前、私も頼まれて被写体になりました。撮られた時は、なんでこんなことをするんだらうって思いましたが、写真があれば孫たちに「ここがお父さんの働いていた場所だよ」と伝えられますよ。
遠い外国の方たちが浪江に目を向けてくれていたことにも驚きましたし、自分も孫たちに浪江の良さが伝えられるよう、浪江に足を運んで家の片づけをするなど、何かしなくてはという気持ちになつてきたんです。今後については、浪江の状況を見ながらじっくり考えたいです。人とのつながりを大事にし、訪問活動はこの先も長く続けたいと思っています。



▲活動拠点の外観
郡山市中心市街地から南西に、車で約10分。郡山市郡山第三中学校と七ツ池クリニックに隣接しています。一度、見学に行ってみてはいかがでしょうか？



▲制作中
賑やかに手を動かしつつ、お喋りをしながら作っています。出来上がりが楽しみです。



福島県

コスモス工房

会長 **神谷 幸枝**さん(末森)
副会長 **菅野ひろ子**さん(苅宿)・会計 **吉野たまえ**さん(末森)
庶務 **西内 孝子**さん(西台)・監査 **鈴木 浩恵**さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月15日

「私たちと一緒に、浪江の話をしましょうよ」
役員も先生方も、参加者も、
浪江の絆でつながっています



▲役員さん、全員集合です。
左から 吉野さん、神谷さん、鈴木さん、西内さん、菅野さん

コスモス工房は、郡山市内に住む女性たちが立ち上げた活動団体です。浪江町民の交流拠点「コスモスふれあいセンター」で毎月、手芸や工芸の教室を開催しながら、同じ地域に住む町民同士の交流を図ることを目的に結成し、今年5月から活動を始めました。現在のメンバーは25名。今後も積極的に参加者を募りたいとのこと。また、早くも十日市への作品の展示依頼が来ているそうです。

設立メンバーでもあり、工房の運営を中心的に担う5人の方々にお話をお聞きしました。

◆活動のお話の前に、みなさんの震災当時や避難の様子をお聞かせください

神谷 救護院という施設で調理員をしていました。地震発生後、利用者108名を連れて、施設職員と白河市「太陽の家」へとバスで避難。家族とは全く連絡が取れず、娘たちはテレビのテロップで「行方不明者」として名前を見たそうです。役場にいた夫も複数の避難所を移動し、同様でした。幸い私は、川崎市に住む夫の姉夫婦を頼り、ようやく家族の無事を確認できたんです。それから夫と共に転々とした後、娘たちが暮らす郡山市に。一昨年12月、家族とは二度と離れたくない一心で家を造りました。

菅野 夕方からの仕事に備えて、家で準備をしていました。夫や長男と連絡が取れたのは夕方でした。12日朝「津島に避難するように」と町内放送があり、向かいでしたが、津島は凄惨な状況で、娘夫婦と合流できたのは19時頃でした。川俣町、福島市、那須塩原市と移動し、栃木県益子町の青

年の家に。その後、長期滞在した松川屋須高原ホテルさんには大変お世話になりました。2011年8月半ばから郡山市の借上げに住んでいましたが、今は郡山に自宅を構えました。

西内 双葉町で就労中、同僚たちと円陣を組んで地震が治まるのを待ちましたが、怖かったです。車で帰る途中、線路を歩いて帰る人たちを見ました。停電と余震のため、家から少し離れた所に車を止め、義母や友人たちと夜を明かしました。翌日、防災無線を聞いてお隣と一緒に福島市へ。会津や猪苗代「国立磐梯青少年交流の家」などを経て、義母と郡山市日和田に。今は市内のマンションですが、近々家を建てます。

吉野 あの日、夫や母、三男と共に家にいました。出かけていた次男も戻り、翌日の避難は、南相馬市原町から知人のいる白河市へ。その後、郡山市体育館から裏磐梯に移りました。家族がずっと一緒でしたので、他の方のような苦労は少なかったと思います。

鈴木 夫は石川町に単身赴任中で、私は町の金融機関に勤めていました。電気も水も止まった状況で、浪江日本ブレイキさん願っています。

60代になって家を建てるなんて思ってもみませんでした。人生には限りがありますが、孫守りをしながら、家族で力を合わせるために、抛り所となる家が欲しいと思いました。浪江に直ぐには帰れないのに月に2度ほど家の周りを掃除しています。何だか涙が出てしまいますね。

吉野 浪江には戻りたいと思います。でも今はセンターで和気あいあいと過ごします。みなさんと浪江の話をしたいですね。

鈴木 浪江の家は今後どうしたいのか、まだ決めかねています。今は郡山に溶け込むように努力しています。

菅野 除染してもなお放射線量が高いので、浪江の家には孫たちを連れて行けません。郡山に孫たちが集まるのが、今の一番の楽しみです。

西内 避難先の郡山市で母を家族葬で見送った時は辛かったです。本当に、身に降りかかれば、解らないことばかりですね。今は、施設のサービスを上手く利用しながら義母と暮らしていますし、センターで和気あいあいと活動するのが楽しいです。そういう人たちがもっと増えてほしいです。

コスモスふれあいセンター（浪江町交流会館） 郡山市七ツ池町26-20 ☎024(953)6369

神谷 「一緒にクラフトをしましょう」と呼びかけることで、外に出るきっかけを作りました。合いを広げたいと思いました。一口にクラフトと言っても、メンバーには各々得意・不得意がありますから、手芸の他に七宝焼、陶芸などのプログラムを作りました。今後もプログラムをどんどん増やしていきたいです。

◆コスモス工房（以下、工房）の成り立ちや活動を教えてください

吉野 役員は皆、自治会（郡山コスモス会）の会員です。工房を立ち上げ、活動のために町の補助金事業に応募することになり、元学校教師のメンバーが申請書類作成から手続きまでやってくれました。昨年7月にオープンした「コスモスふれあいセンター」（以下、センター）

による炊き出しには感謝しています。南相馬市原ノ町から福島市飯坂町のパルセイりいざかへ避難。夫と合流し、赴任先の石川町に移りました。その後、相馬郡新地町を経て郡山市に。市内に家を持ちましたが、夫は今、榎葉町勤務のために単身赴任しています。

鈴木 郡山市内にもいろいろなサークルがありますが、地元の方々の中にはなかなか混ざり難いです。このセンターと私たちの活動をを通して、気軽に話ができる町民コミュニティの場になりたいと思います。

◆これからの工房の活動に対する抱負や、ご自身の生活、浪江への想いなどをお聞かせください

神谷 補助金の使途は、講師の交通費と教室の材料費が殆どです。先生方にはこうした活動に二つ返事で協力いただいています。今は、おしゃべりが多くて作品づくりが後になっています。行く行くは自分たちで教え合えるようになりたいです。センターがいつまであるか不安ですが、長く活動を続けたいと